平和通り・中央通り界隈

エリアAで紹介した停車場新道が開通したことにより、官公庁街・商店街として発展したのが、ここ平和通り・中央通り界隈です。

明治の初め、このエリアの大部分を占めていたのは「大学校」とよばれた小学校でした。市街地の子供が一同に学ぶマンモス校で、興譲小学校の前身にあたります。校舎は、米沢藩武芸所の旧材を利用して建てられた和洋折衷の建物で、なんと三階建てでした。

明治時代の大学校

大正六年（一九一七）・八年（一九一九）両度の大火で市街地の大半が烏有に帰したことをきっかけに、米沢市は、市区改正・道路拡幅・官公庁の移転など街の再編成に着手します。そのとき、市役所・市議会堂・消防署などの官公庁がこのエリアに集中して移転してきます。大学校の跡地などまとまった土地があったこと、停車場新道によって交通の便がよくなったこと、立町の商店街に近く市民が利用しやすいこと、などの理由で、大正時代の末頃にはすっかり官公庁街となり、これが昭和四十年代まで続きます。そして、官公庁の周辺には、自然と飲食店が集まるものです。現在も、平和通りや中央通りの周辺に料亭や居酒屋が多いのは、半世紀にわたって形成されていったこのころの街が残っているからなのでしょう。

大火後に再建された米沢市役所

さて、昭和四十年代になると、今度は官公庁が次々と金池に移転していきます。その跡地に進出したのが、当時市民が待望していた大型百貨店です。昭和四十五年（一九七〇）の大沼デパートを皮切りに、米沢ショッピングセンター（カクダイジャスコ）・ファミリーデパートが相次いで開店、同五十二年（一九七七）には平和通りにアーケードが設置され、商店街らしい街並みが整えられていきます。これにともなって、人の流れも次第に中央通り・平和通りへと集まり、昭和五十年代には、このエリアが銅町・立町にかわって米沢一の商店街となったのです。

その後、昭和の末頃から大沼デパート以外の大型店が閉店し、米沢ショッピングセンターはポポロ館と名前を変え、米沢市が市民ギャラリーを開設し、米沢市民の文化芸術の発表の場としての役割を果たしています。年間を通じて数百回の展示会が行われ、まさに文化芸術の拠点となっています。

中央通り

もう一つの大型店の跡では、滝の流れる多目的スペース「まちの広場」として整備され、夏の時期にはラジオ体操やフリーマーケット、骨董市や音楽イベントなどが不定期に開催されています。また年末にはイルミネーションが点灯され光の美しさに見とれます。

平和通りのアーケード街

共立ビルの一階には地元作家の作品を展示・販売する「アートステーション」がオープンし、また音楽のライブハウスもできて、市民文化会館とともに多彩な芸術文化活動の発信地となっています。

さらに山大工学部の「街中キャンパス」も開設され地域をあげて街なかのにぎわいを創る取り組みが行われています。

平和通り・中央通りは、かつてのように訪れる人が消費するだけの街ではなく、みんなで創造し発信して楽しむことができる街へと変わり始めているようです。

足をのばして……

西條天満神社

平和通り駐車場の南側に、こんもりと緑が茂る小さな丘があります。この上に鎮座しているのが西條天満神社です。

有名な京都の北野天満神社の「北野」は地名ですが、西條天満神社の「西條」は人の名字です。この場所は、米沢城三の丸にあった上杉家臣西條家の屋敷の一部で、そこで代々守り祀られきた天満神社であるため、このように呼ばれています。ご神体は菅原道真を描いた掛軸で、西條家の先祖西條倫房が、鎌倉時代末期に後醍醐天皇から賜ったものという由緒が伝えられています。

西條天満神社と三の丸の遺構

平和通り・中央通り界隈

エリアB

境内地が小高くなっているのは、ここが米沢城三の丸の土居＝土手にあたるからです。米沢城には石垣がなく、その代わり土を盛り固めた土居で囲まれていました。つまり、平和通り駐車場の西半分はもと城、東半分はもと堀ということになります。西條天満神社は、数少ない米沢城の遺構のひとつとして貴重な存在です。

平和通りから南へ伸びる武者道

ところで、平和通り駐車場の東側には、水路をはさんで細い道が南北にのびています。これは、江戸時代に「武者道」といわれた小道で、城内に住む武士が町人町に買い物に出るときに使ったという道です。人目をはばかるため堀沿いにあり、町人町の中をあまり歩かずにすむようになっていました。平和通りにある高山紙店とカメラの尾原の間からこの道に入り、西條天満神社を見ることは、江戸時代に武者道から堀をはさんで城を見るのと同じかたちになります。米沢城をリアルに感じることができる数少ないスポットです。

こんなちょっとした裏通りにも歴史のロマンを感じることができるのは、城下町ならではといえるでしょう。

猫の目時計

平和通りから北の立町通りへぬける遊ゆうロード毘に、変わったオブジェが立っています。これが、遊ゆうロード毘のシンボル「猫の目時計」です。大きな目玉がアナログ時計の針にあたり、南西を向く面が時を、北東の面が分をあらわしています。一日四回の時報は、猫の鳴き声です。

なんともユニークでユーモラスなこの時計は、米沢出身の漫画家 ますむらひろし氏の作品『アタゴオルは猫の森』に登場する時計をモチーフとして作られたもので、デザイン・監修はますむら氏本人がおこないました。

ますむら氏の作品は、ほかにも米沢のあちこちで目にすることができます。イラストを車体にラッピングした図書館の自動車文庫「アタゴオル」・市民バス「ヨネザアド号」が毎日のように市内を走り、米沢信用金庫では預金通帳のデザインに採用しています。

カラフルでやわらかいタッチのイラストは、街の風景のよいアクセントとなっています。

猫の目時計

●聖徳太子尊
江戸時代に大工の町だった地番匠町の鎮守です。聖徳太子は、大工の守護神としての信仰も集めています。

●永勝院熊野堂
江戸時代には、大善院という修験道の有力寺院でした。一説に「米沢」という地名の由来とされる米井という井戸があったところです。

●藩校興譲館跡
ここに元治元年（一八六四）まで米沢藩の藩校興譲館がありました。沿革などを記した石碑が建てられています。

●アートステーション（ホテルサンルート1F）
地元在住の現代作家の作品を中心に展示・販売しているギャラリーです。

●米沢民謡会
道路沿いの大きな太鼓がディスプレイされ目を引きます。米沢の祭りを盛り上げるのに欠かせない民謡社中です。

●映画『さゞなみ』ロケ地
豊川悦司が演じる何でも屋 玉水が住んでいるアパートのシーンが撮影されました。

●福王寺法林記念館
米沢出身で文化勲章を受章した日本画家 福王寺法林の作品を展示しているギャラリーです。米沢新聞社が運営しています。

米沢人は餅が好き?!

米沢を訪れた人は、街中にあふれる「上杉」と餅屋の多さに驚くようです。それほど広くもない中心市街地に一〇店以上の餅屋があるのは、確かに多いといえるでしょう。

なぜ米沢には餅屋が多いのでしょうか。米沢の人は餅が好き、特に搗きたてのやわらかい餅が好き、というのが大きな理由のひとつになっているようです。明治時代に上京した米沢人のひとりは、「帰郷して食べた搗き入り餅の味は格別、米沢に帰ってきたことを実感する」という内容を手記に綴っています。故郷の味が搗き入り餅、というのがポイントです。このような嗜好があるからこそ、スーパーなどでいつでも切り餅が買える現代においても、米沢ではたくさんの餅屋が繁盛しているのでしょう。

また、ふだんのお茶請けとして、あんびん（大福）をはじめ、だんご・ゆべし・ほうさい餅などの餅菓子が好まれていることも、理由のひとつかもしれません。

餅はハレの食べ物ではありますが、米沢ではすっかり日常にとけこんで、人々に愛され続けているということなのでしょう。

米沢人は雑草が好き?!

スベリヒユという草をご存知でしょうか。赤い茎に肉質の葉、春先から畑や道端などに自生して、夏には小さな黄色い花を咲かせる、どこにでもあるいわゆる雑草です。

米沢では、これを「ひょう」と呼び、春夏には茹でて辛子醤油あえで、秋冬には干しておいたものを水戻しして煮物にして食べます。特に、ひょう干しの煮物は「ひょっとしたらいいことがある」という語呂合わせから、縁起のいい食べ物として正月に食べる風習があります。このことは、最近テレビ番組でもとりあげられ、一躍有名になりました。事実、スベリヒユを救荒食としていた地域はあっても、日常的に食べるのは、日本広しといえども米沢だけのようです。

「雑草を食べるなんて変！」と思われるかもしれませんが、考えてみれば、身近な植物を上手においしく利用している、という意味ではハーブや山菜と同じですよね。

たかが雑草なれど、現在のように年中たくさんの野菜が手に入らなかった時代の食文化の一端を垣間見せてくれる貴重な存在、そのひとつが、この米沢のスベリヒユではないでしょうか。